

松波むかし語り

ここに生き続けて

その27

今回のお客様

“駅から近い”と越した松波で47年！

かが よしまさ
加賀 祥公さん 89歳 2丁目

“骨惜しみしない、気配りと目配り、ささいなことにも注意を払って生きてきました。”

—そうした精神でいろいろの仕事をごこなして来られた加賀さん、節制と努力の人ですね。



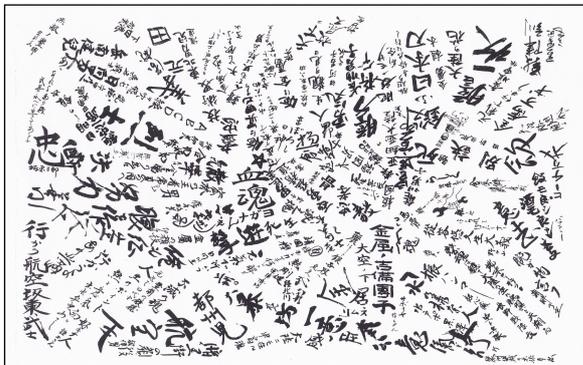
「大正 11 年生まれなら、朝のドラマの主人公と同年だ」、副会長の石田さんに言われてもしばらくは、加賀さんとNHKテレビ「おひさま」の主人公、「陽子」とが結びつきませんでした。でも、陽子もいま放映の戦後間もない頃から 60 年経つと、加賀さんのような風雪をくぐってこられた顔付きになるのかなと納得してしまいました。

加賀さんは兵役にあった昭和 18 年、日本軍がインド攻略をねらったインパール作戦に参加するため、県内柏にあった飛行場から飛び立ち(その時のよせ書きが今も残っています)、ビルマ(現ミャンマー)のミートキーナ基地に40数機で到着、そこで戦闘機「鍾馗(しょうき)」に乗ってイギリス軍機と戦いました。しかし食糧も武器も不足して戦局は劣勢に回り、終戦を迎えた時は保有機30機のうち飛べるのは15機に過ぎませんでした。戦争が終わった後、憲兵隊としての派遣命令を受けた先でマラリアにかかり、一時は意識も薄れるほどでしたが病院船で帰国しました。

その後、ご両親のふるさと、疎開先である北海道函館周辺の病院に収容されましたが退院、昭和 23 年、故郷の千葉・要町に戻って来ました。それからは農業に始まって市役所の職員、中華料理店のコック、うどん屋などを歴任、酒屋の時は顔の広さから県内小売りでトップになる成績をおさめたと言います。昭和 27 年に結婚、知人の紹介で、その後長く勤めることになる現在の三井住友銀行に職を得ましたが、ここでも顧客集めでトップの成績をおさめたそうです。

加賀さんの先祖は若狭の国の武田氏の家来で、武田氏が蠣崎(かきざき)氏と名を変え、幕府の版図(はんと)を広げるため北海道に渡ったのに同行しました。千葉へは、軍人であったお父さんが、旭川の師団から千葉歩兵連隊へ転属するため移ってきました。

加賀さんのモットーは、「骨惜しみをしない、気配り・目配り、ささいなことにも注意を払う」だそうです。戦後、札幌の狸小路(たぬきこうじ)で、屋台でリンゴの叩き売りをした時は、「余市までトラックを飛ばして仕入れたんですが、当時、リンゴは統制品でしたからよく売れました」。いまは体を壊された奥様に替わって、買い物から料理、茶碗洗いまでこなすのは、コックや食堂の経験が生かされているのでしょうか。「健康法ですか？ 毎日、自転車に乗ることです」と。さすが、「骨惜しみをしない」を地でゆく加賀さんです。



昭和 18 年 12 月 3 日、作戦命令が下りビルマに向けて日本を出発した。「この時のよせ書きは、後世いつも新しい事に取り掛かる際の気持ちの原点になってきた」と加賀さんは語る。



平成 16 年末、貴重な発見として新聞掲載の記事。旧日本陸軍二式単座戦闘機「鍾馗」(しょうき)のものと思われるエンジンが京浜運河で発見された。

